

〔日本語要旨〕  
熱狂の坩堝から  
—田楽と異類異形—

橋本 裕之

私の関心の一つは人々が芸能をどう認識しているか、つまり人々によって構築される想像力の世界に向けられている。私はこの論文において、中世芸能の代表的な様式の一つである田楽の場所について論じる。日本において中世は一般的に、院が政治的な権力を持つ12世紀半ば、もしくは鎌倉幕府が成立する12世紀終わりから、室町幕府が崩壊する16世紀終わりにかけての封建的な時代として定義することができる。中世は古代天皇制が終焉して、在地領主制に立脚した封建制が発展した時代である。封建制は社会的かつ文化的な諸現象に深く影響しており、芸能も封建制に接続したユニークな性格を付与されていた。

田楽はかつて中世日本において、人々の間でカーニバル的な熱狂を喚起した。田楽は田と楽という漢字で表記されるため、しばしば農耕儀礼から生まれた牧歌的な芸能であると誤解されてきた、だが、田楽はそもそも大陸から輸入されて都市的な芸能として演じられており、主として曲芸とマジックによって構成されていた。演者はびんざさら（木製の拍子木の一種）、腰鼓、笛などを演奏しながら、シンメトリカルなダンスを見せた。田楽は今日も民俗芸能の様式として日本各地に残存しているが、中世において田楽が伴っていた熱狂的な経験はもはや存在していない。つまり形骸化してしまったのである。田楽は現代的な芸術として普遍性を獲得した能や狂言と違って、中世を乗り越えることができなかった。こうした意味において、中世の始まりに誕生して中世の終わりに死滅した田楽は最も代表的な中世芸能であるといえることができる。

田楽はしばしば天狗（長い鼻を持つ妖怪）やそれ以外の他者にまつわる奇怪なイメージを用いて語られてきた。そのようなイメージは演者に対する社会的なイメージを反映しているのみならず、中世日本における演者の曲芸的な身体によって広く生み出された熱狂もしくは異常な経験を象徴的に表現しているとも理解することができる。しかも、田楽によって喚起されたカーニバル的な熱狂は封建制、つまり中世日本の社会制度を脅かす悪い前兆であると広く信じられていた。この論文は田楽に関する顕著な言説のいくつかを検証しながら、こうした言説が中世日本における熱狂の修辞として創造されていった過程を焦点化する。